

はみ出し
銀行マンの



恋愛日記

横田濱夫

著者略歴

横田濱夫（よこた はまお）

1958年、東京生まれ。

1981年、通称「港のみえる丘銀行」入行。在職中に刊行した『はみ出し銀行マンの勤番日記』（角川文庫）が30万部のベストセラーとなる。

主な著書として、『はみ出し銀行マンの乱闘日記』（角川文庫）、『はみ出し銀行マンの左遷日記』（オーエス出版）、『史上最強サラリーマンマニュアル』（角川書店）、

『バンカーズ・セックス』（KKベストセラーズ）、『はみ出し銀行マンの珍事件簿』（東京書籍）、『はみ出し銀行マンの悪徳日記』（東京書籍）等がある。

事務所FAX、03（5707）1051

はみ^だ出し^{ぎんこう}銀行マンの恋愛^{れんあいにつき}日記

1996年5月20日 第1刷

著 者 横田 濱夫（よこた・はまお）

発行者 福澤 英敏

発行所 蠟近代文芸社

〒112 東京都文京区目白台2-13-2

TEL 営業(03)3942-0869 編集(03)5395-1199

FAX (03)3943-1232

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

製 本 小泉製本所

©Hamao Yokota 1996 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-7733-5425-9 C0095

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

はみ出し銀行マン
の
恋愛日記

近代文藝社

はみ出し銀行マンの恋愛日記・目次

第二章 三四郎の恋

十三年前の秘密

フロントに天使現わる

偶然、電車で……

第二章 坊っちゃん大いに暴れる

スポーツクラブへ行こう

マツチヨマン高田氏

造木コムラ君

感電パフォーマンス

海坊主現わる(ねえ、ヘンな人がいるよ)

サウナで歌が聞こえる(歌のおねえさん)

金魚のフン

やったぜ、デートだ!

第三章　そして寅さんになった

海パンを忘れた！

ああ、Tバック

悪魔の棲むジャグジー

「あれえ、いまパンツ脱いでる？」

デリカシー

無国籍風居酒屋にて

唇がとれない！

よくある会話

サグリを入れる

彼氏のこと

ジェシカ

夢を語ろう（おねえさんの夢）

アブねえオヤジ

自由ヶ丘『チャーリーブラウン』にて

女はみんな銀紙に弱い

更衣室の秘密

協調性、人間性、および人格について

貼り紙事件

もう行っちゃうの？

第四章 城ヶ島慕情

声だけでも聞きたい

電話

深夜のドライブ（危険な二人）

パトカーにつかまる

城ヶ島へ行こう！

Just the two of us（海を見つめながら）

貴彦のこと

「K君、みんな知ってたんだね……」

世界で一番恋の似合わない男

波の音が聞こえる……

はみ出し銀行マン
の
恋愛日記

第一章 三四郎の恋

十三年前の秘密

もうだいぶ前のことだ。オレは、ある女の子のことが好きでしやうがなかった。

だいぶ前というのは、ちょうど新入行員で入った頃。だから、かれこれ十二、三年にもなる。その子の名は、三ッ橋令子という。

髪が細く、日本人ではこれ以上ないんじゃないかと思うくらい脚がきれいだった。

オレが二十二で入った時、その子はたしか入行二年目の十九才。銀行では、税金の窓口をやっていた。

スタイルが良かったのはもちろん、顔だてきれいだった。それも、外人みたいにくつきりこつてりというのではなく、むしろその反対のあつきりタイプ。

もつとサラッとしていて、淡白だった。そして色白。

純和風でもなければ、純洋風でもない。両方の素敵なところだけが合わさったような、そんな感じだった。

とにかくスタイルがいいから、何を着てもよく似合った。センスも良かったし……。

つまり一言で言えば、カッコ良かったんだ。

性格はというと、やさしかった。

それまでオレの回りには、学生ときを含めきつい女の子が多かったから、三ッ橋を見ると、そのやさしさがとても新鮮に感じられた。

誰に対してもやさしかったし、特に自分の好きな男に対しては、なおさらだった。

ハタから見ても「こいつ、騙されてるんじゃないの？」と思うような、献身的なやさしさだった。

ところがはたして、騙されていた。

当時オレが入った時、三ッ橋は既に、同じ支店の五、六才年上の同僚とつき合っていた。でまた、これがたいそうなワルだった。

そいつは話もおもしろく、人柄的にはいい奴だった。けれど、そのオンナ癖の悪いことときたら、もう始末に負えなかった。

ほんと、手当たり次第というやつ。なにしろ、当時その店にいた女の子二十数人のうちのほとんども、後天的な姉妹関係になっていた。

おまけに、後始末も考えないでどんどんやつちゃうもんだから、支店の中はもうメチャクチャ。これ以上の無責任というのもなかった。

そんな男に、一番どつぷりいつてたのが三ッ橋だった。

例えば、その男が盲腸で入院すれば、銀行を休んで朝から看病に行ってしまう。しかもその時なんか、男の方は別の女と結婚した直後とくる。つまり、つき合い初め頃はまだ独身だったけど、その後あっさり、別の女と一緒にになっていたというわけだ。

それでも、三ッ橋は切れなかった。以後もずーっと続いた。で、もはやそのことを知らぬ者は、支店中誰一人としていなかった。

こういう時、普通だったら思うよな。たとえどんなに好きであっても、こりゃあもうどうにもならないって。

ところが三ッ橋は違っていた。

男の、「したくとした結婚じゃない。今の女房を愛してもいない。必ず別れるから、もう少し時間をくれないか。そして、そのあかつきには君と一緒になろう……」という、例のよくあるセリフを真に受けて、ほんとに信じ切っていた。

だからこの三ッ橋という女、案外騙されやすい、ただのバカだったのかもしれない。

が、ハタからみれば騙されてるとわかつているのに、ひたすらケナゲに、ますますツクしてしまう三ッ橋。それを見てみると、なんだかとてもかわいそうで、そのかわいそうと思う気持ち、オレにはよけいとおしく感じられた。

と、ここまで書けば、もうおわかりいただけたかもしれない。

つまりオレは、この三ッ橋つて子とは何にもなかったんだ。ただの片思いつてやつ。十何年前の、淡い片思い……。

もっとも、何度か三ッ橋に、「あんな奴やめて、オレとつき合えよ」ふうのことを言ったことはある。だけど三ッ橋の眼中には、あいつ以外の男は全く存在しない感じだった。

最初の店に、オレは四年いた。

その後、他の支店へ転勤になり、一方また三ッ橋も、すぐに別の支店へ転勤となった。

はじめの店の人達は、みんなけつこう仲が良かったから、転勤した後も、誰かが結婚したり退職したりする都度集まっていた。で、そういう席で三ッ橋に会ったりすると、やはり胸がキュンとしてしまうこともあった。

だがそれも、時と共にだんだん薄れていった。そりゃそうだよな、あれからもう十何年経つ

んだし、こっちだってそのテのことは、その間なくはなかったから。

そんなこんなで、ここ何年かは、あれほど好きだった三ッ橋を思い出すこともなくなっていた。

フロントに天使現わる

ところが最近、オレからすればもはや風化していた三ッ橋を、いやでも思い出さざるを得ない出来事が起った。起ったというよりも、そういう状況が設定された、と言ったほうが正確だろう。

オレは三年ばかり前から、あるスポーツクラブの会員になっていた。住んでいる上野毛の一つ隣、二子玉川にある『エックス』というところだ。

そこにはコーチやらなにやらで、アルバイトのおねえちゃん達が大勢いる。

フロントにも何人かいるのだが、そのうちの一人がそうだった。そう言うのは、つまり、三ッ橋令子にそっくりだったのだ。

いったいどのくらいそっくりかというところ、これがまた似てるのなんの。これ以上はないという、究極のそっくりさだった。

背の高さから肉のつき具合、髪の毛のちよつと茶色いところから、なにか困ったことでもあるような、どこか頼りなげな眉の形まで、もうなにからなにまでウリ二つ。

髪形も、始めはパーマがかかつていて、少し違っていたんだが、最近それをストレートにしたもんだから、とうとう完璧になつてしまった。

その子は、半年ばかり前からバイトに来ていた。

最初それを見た時の驚きといったらない。てつきりホンモノだと思い、一瞬なにがなんだかわからなくなつた。そして、目を合わせないように、ソソクサとその前を通り過ぎた。何故だかわからないけど、そうしてしまつた。

その後何回か会ううちに、ようやく冷静に考えられるようになった。

（やつぱりそんなはずないよなあ。だつて三ッ橋は、オレが二十二のとき十九だつたんだもん。なのにこの子は、どう見たつて二十かそこら。だつたらやつぱり別人だよな。きつとそうさ、たまたま似てるだけなんだ……）

（でもまてよ。三ッ橋には妹が一人いるつて言つたつけ。会つたことはないけど、たしかそんなこと言つてた。とすると、この子はその妹なのかもしれない……）

フロントでは、行くとまず、会員番号と名前を記入する。そして会員証を渡すのと引きかえに、ロッカーのキーを受け取る。

帰りはその逆で、キーを返して会員証を受け取る。ただそれだけのことから、あまりペラペラしゃべるといふこともない。一回、ほんの十秒かそこら。しかもそのわずかな時間の大半が、名前を記入するんで下を向いている。

それからオレは、行く度に、チラツ、チラツと観察するようになった。

もつとも、いつもいるわけではない。バイトだから来ない日もあるし、オレの行った時間にいないこともある。それにフロントには、たいてい女の子が三、四人いて、その子が受けてくれる確率も低かった。

そんなことをしているより、一番てつとり早いのは名前を聞いてしまうことだろう。聞かなくても、胸にはいちおう名札がついている。

ところが、バイトの名札というのは手書きのちゃっちゃいやつで、これがよく読めないんだ。あんまり胸元をジロジロ見てて、こいつ、エッチおやじだなんて思われるのもいやだった。

とまあそんなわけで、これまでついに、その子の名前すらわからなかった。